

◇牧師室より◇

昨年の11月、思いがけない訃報を受けた。牧師室の一本の電話はFAXとPC専用にして、普段は留守電にしている。時々ベルが鳴るが、何かを売りつけようとする電話ばかりなので受話器を取り上げることはない。ところが、あの時は、ふっと受話器を取った。神学校で同級生であった無二の親友の奥さんが急逝されたとの息子さんからの電話であった。本当に驚き、言葉を失った。

親友は49歳の時、直腸癌で召された。最後に見舞った時、言葉が出せなかった。私が枕もとで「僕が死ぬ時、君に見舞いに来てもらえないね」と言ったら、震える手でサインペンを持ち「天国のドアマン」と書いてくれた。私が死んだ時には、天国のドアを開いて待っているという意味である。自分の死を目前にして、これだけのユーモアを持てる信仰に感嘆し、私を慰めてくれる優しさに涙した。彼が召された時、高校生と中学生と小学生の3人の子供がいた。以来、奥さんは病身をおして、幼稚園の事務の仕事をしながら、懸命に子供たちを育ててきた。電話する度に「祈ってくださって感謝します」という言葉が決まった挨拶であった。

上の二人は結婚し、それぞれ子供が与えられている。三番目も一昨年、大学を卒業し働いている。フィアンセもいると聞いている。気丈に、そして祈りによって子供たちを確かに自立させてきた。疲れ切ったのであろうか。56～7歳であろうと思う。

「葬式はしない」という遺言を残して逝ったらしい。教会は礼拝の中で、彼女の追悼会をする形にした。お陰で、私はお別れに行けなかった。

親友は天国で、奥さんを優しく迎えているだろう。奥さんは「私たちを残して、どうしてあんなに早く逝ってしまったの、私苦労しました」と文句を言うと、彼は例によって大口を開けて笑いながら「それは神様の御心だよ。子育て、本当にご苦労さん、子供たちは立派に成長したから、神様にお願ひして、ここに呼んでもらったのだよ」と答える。そんな光景が思い浮かんでくる。

悲しく辛い訃報であったが、天国で語らう二人を思って慰めを得ている。早過ぎるご夫妻の死が頭から離れない。ところが、心配になってきた。親友は奥さんとの積もり積もった話に熱中し、私が天国に行った時、ドアマンの勤めを忘れるのではないかと。

週 報

2001年1月21日 降誕節第4主日

巻 21

43号

2000年度 教会主題

「主イエスに従う」

聖句 わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

マルコによる福音書 8章34節b-35節

- 目 標
1. 生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
 2. 十字架の福音に従い、これを宣教する。
 3. 教会創立20周年記念を祝い、将来を語り合う。

日本キリスト教団 横浜港南台教会

横浜市港南区港南台7丁目8-29

郵便番号 234-0054

電 話 045-833-5323

F A X 045-833-6616

振 替 00290-4-13994

牧 師	秋 吉	隆 雄
伝道師	齋 藤	忠 雄